

神の川ヒュツテ通信 第94号

発行日 平成28年3月1日
発行者 神の川ヒュツテ代表 杉本憲昭
相模原市緑区小淵 1545-1 北丹沢山岳センター内
TEL042-687-4011 FAX042-687-3980

神の川街道の物語 年末から新年にかけて折花姫神社に折りました。神の川林道の街道沿いに青根音久和集落ではババア宮、神の川キャンプ場の入口にジジイ宮、折花橋の木立の中に折花神社が奉られています。この神社の大きな木のもとに金七百貫が埋められているなど言い伝えられています。そして神の川ヒュツテには折花姫の本尊が奉られています。



折花神社 入口と烏井



神の川ヒュツテの今 昨年末には秋に続いて2度目のヒュツテ外壁塗装を完了しました。早いもので平成4年に神の川ヒュツテの経営を始めから24年目を迎えました。この間平成19年9月12日には台風の影響でヒュツテが土砂に埋まり、それを乗り越え再建を果たしました。今日の任務は北丹沢の登山道改修工事や調査活動などと、ヒュツテに設置されているヘリポートが蛭ヶ岳山荘・青ヶ岳山荘や避難小屋の整備活動等の多くの分野で活用されています。さて、わたしたちの今年の課題は、水源地为不安定な状況になっており、隣接する県の公衆トイレも水源を同じくする為、

世に伝える歴史 もう一度振り返って生きることのリフレクシユをしたい 神の川街道の歴史は1989年5月20日号の尊仏第2号で栗原祥、山田邦昭、小室行弘により「神の川～大室山」で紹介されています。そして甲陽軍艦では折花姫の父小山田八左衛門が甲府善光寺にて殺されるとされています。

折花姫 武田勝頼が織田・徳川の連合軍との戦いに敗れ天目山の麓で自決したのは天正十年三月十一日の事でした。この時、旗本の一人であった小山田八左衛門行村は一族と共に脱出し奥津久井に入り神の川を廻り丹沢山中に逃げ込もうとしました。しかし敵方の追及は鋭く逃げおおせぬ事を悟った八左衛門は最愛の娘・折花姫を翁と姥に託し神の川へと落ちのびさせ自らは踏み止まり奮戦したが衆寡敵せず討死してしまいました。(西野タマ丹沢主脈縦走路焼山への登山ロープに天正十五年四月九日・勇心良誉信士・甲州武田家人小山田八左衛門と刻まれた石があります) 追手は冷徹にも一人も逃さじと姫に追討ちをかけた。懸命に逃げるもの、か弱い姫の足は思うようには捗らず、たちまち音久和(おぐわ)の辺りで追付かれ遂に姥に矢が当たってしまいました。介抱しようと駆寄る姫の手を振り払い姥は姫の打掛を披って敵の目を引付け反対の方向に走りました。第二・第三の矢が体に突刺さり姥は崖下に転げ落ち息を引取りました。(そこにババア宮を祀り、今ではババア神と言う地名だけが残っています) 姫は悲しみの中に姥に手向の念仏を唱えつつ馴れぬ山路を登っていきまされた。(その場所をアマダ申ジと言います) 姫を射止めたと思った追手は姥のなきがらを見てだまされた事を知り手分けをして捜し始めました。そして溪谷を遡っていく二人を発見するや矢弾を雨あられと射ちそそぎました。遂に頼みの翁も傷付き今はこれまでと翁は姫に行先を教え敢然と群がる敵に立向かいました。そして山陰に、おぼつかぬ足取りで消えて行く薄幸の姫の後姿に手を合わせ「お可愛相な…」と呟きつつ神仏の御加護を祈りました。(そこをカナイ尾根と言う) 翁は重傷にも屈せず敵と渡合い壮烈な討死をしました。(そこにジジイ宮を祀る) たった一人となり残された姫は更に神の川を奥へと分け入ったが、間も無く追手の重囲に陥り今は逃れる術なく自から横剣で喉を貫き無念の最後を遂げたのでした。「そこ一神の川林道のトンネルを出た所に折花宮が祀られていて、今だに宮付近の木を切ると祟りがあると伝えられている」と津久井郡勢誌に書かれていますが今は跡形も無くなっています。



ジジイ宮 (左) とババア宮 (右) の祠

長者舎物語 丹沢の北面、袖平山から県下の最高峰蛭ヶ岳、かつて秘峰と呼ばれた松洞丸、北方の雄大室山等々の懐から湧きでた清冽な水を集め北流する神の川。その10kmに及ぶ流程のほぼ中央の川岸に小さな平地があり、ここが長者舎と呼ばれる所で次の様な伝説があります。昔、いずこから逃れて来たのか長者の老夫婦と、その娘が隠れ住むようになった。長者の名は天野茂左衛門、娘の名は折花姫と言いつ大層美しかった。この一家は大変な金持ちで其の富を守るため大室山から東に派生する尾根上の鐘撞山に鐘撞を設け常に鐘守を置いて敵の見張りをさせておりました。しかし或る時、盗賊の群れが不意を突いて襲って来たので見張りもその用をなさず一家は神ノ川を下流へと逃れたが、たちまち追いつかれた折花姫は辱を受けるよりはと淵に身を投げてしまった。尚も追手は爺を社宮司沢まで婆を音久和の辺りまで追って次々と殺してしまつた。その後、長者様の屋敷跡からは『さる木の根元に宝の瓶七ツ』と言う書物が見付かったが、未だに、この宝を捜し当てた者はいないと言う。また長者様は金の鶏を飼っていたとも言われている。



現在の立石建設駐車場内に建つ天野茂左衛門の碑

★さて、この二人の折花姫が同一人物であることは容易に想像できる。そして、最初の物語の方が古いものである。伝承は次々に新しい要素を付加えていくものであり、ある女性の主従の死に長者や宝の話が付け加わったのではなからうか?前回、主脈縦走の姫次の項で紹介した同じ津久井の鳥屋の伝説は一人の女性が丹沢に逃げ込もうとして討果たされた記憶が変形して残っていたのではなからうか?今は山梨県の道志村で発行した(1953年)村誌「道志七里」に掲載されている長者と折花姫の融合した話が津久井の方まで浸透してきて、<6>の物語を知っている人は4年前の調査の時は、たった一人になってしまったとは、折花姫の伝承を採録された小川良一氏の言である。私も、こちらの話は聞いた事がなかったので氏にうかがって掲載させていただいた。もっとも、<7>の話にしても、原型に近い伝承と言う事であって、必ずしも史実ではない事を念頭に置かなければならない。また折花と言う名前に付いては旅人が小枝を折って、その山神様へ手向けの標として捧げる霊地をワリバナサテ、シバラリサンなどと言うとある。(山村語彙による)

編集後記 神の川ヒュツテは神奈川国体の選手強化を目的に、当時の藤野町と牧野財産区より藤野町山岳協会が借用したのが平成4年でした。あれから24年の歳月が流れました。新しい時代に翻弄され、この間NPO北丹沢山岳センターという荷い手も出来上がり、山での競技も山屋とトイレランナーとが共存する時代となりました。50歳以上で始めた「山の仕事」、私もいつしか77歳となり、そろそろパトタッチの時期を迎えました。是非ご協力下さい。 杉本憲昭